波止場の母と娘（復員余話）

〃文協いろは〃にいろいろ書くのはもう卒業しようと数年前から思っていた。ところが会長さんはおだてるのが実にうまく、それで卒業できずにいる。

おまけに感想を述べたり、励ましてくれる人もいてまだ書き続けている現在である。

私の子供たちは私の書くものは注意深く読んでいるようである。感心して読んでいるのではなく、ボケが始まっていないかどうか検査をしているようである。それがわかっているだけにいい加減なことは書けず、苦労している。

ところが年賀のやり取りをしている古い仲間に、経済界や音楽界で今なお見事に活躍し、新聞紙上などで大きく取り上げられているのを見ると刺激を受ける。

年に一度の短い書きものに、思い悩むことなどもっての外と思うようになった。

読んで下さる人さえいれば、編集者の求めさえあれば、次回からはもっといいものを書いて、批評を受けたいと思っている。

子供たちが住んでいる福岡へ私はよく出かける。最近は伊万里から高速バスを利用しているが、その前は波多津から唐津行のバスを利用していた。客は以外と少なかった。

ある日のことである。少ない乗客の中の一人の女性が私を見て静かに頭を下げた。

私が忘れるのは仲間うちではかなり有名だが、その日もそうだった。どうしても思い出せない。あきらめて考えないことにした。

途中、バスから降りるその人が又頭を下げた。私は知っていたふりをして挨拶を返したが全くわからなかった。

子供の案内で博多港の施設を見て廻った。意外と規模が大きく驚いた。

島育ちの私は海との縁は深い。戦中、生死の境をウロウロしたのも海だった。

岩壁からじっと海を見ていて私は思わず「あーっ」と声を上げた。バスの中の女性を思い出したのである。物静かな伏目の表情、確かにあの時の表情を残していた。

終戦から一年を経過した八月のことである。応召してから五年余りになる親類筋のBが、突如わが家にやって来た。

頭には軍隊の略帽、足には長靴、服は将校用の軍服をまとい、ちょっとおどおどした落ち着きのない態度で

「ゆきちさんね。おじさんはおらすね」

と言う。急いで父を呼ぶと

「おーっ、よう生きとったね。よかった、よかった。お母さんが元気なうちに復員できてほんとよかった。お母さんが喜んだろ。さあ上がってお茶でも飲まんね」
「まだ家には帰っとらんです。おじさんに一緒に来てもらいたくて、ここに先に来たとです」
その声にすがりつくような響きがあるのに気づき、私は何とも言いようのない不安に胸をしめつけられるのを感じた。
「どうして、早く帰ってお母さんば安心させんばたい」
と言ったものの彼の後ろにいる一人の若い女性を見たとたん父は驚きあわてて黙り込んでしまった。事情を察知した父は、助けを願う彼の顔色を見て、私に船の用意をするように言った。
当時は珍しかった、チャッカー船がわが家にはあった。船の用意をしている私のそばに母が来て、
「復員できたのはいいが、許婚のF子さんが待っとらすとばい、あの家が今日まで立派にやってこられたのはF子さんの力ばい、あの広い田んぼや畑を苦労して守ってきたF子さんをどがんするつもりじゃろうか、あの優しかF子さんが可哀想かあ」
そう言って涙ぐんだ。
Bの家のある集落の小さな波止場に着くと、父は私にBの復員したことを先に行って知らせるように言った。ちょっと気は進まなかったが私は坂道を一気に走った。
Bが家に着いた時には、すでに多勢の人が集まって喜び合っていた。F子さんの嬉しそうな顔を見て私は気が重くなった。Bと連れ立って入って来た女性の姿を見て、多くの人たちは急に静かになり、異様な

沈黙が続いた。
F子さんは台所の方へ行ったままいつまでも、もどって来なかった。のぞいて見るとそこにうずくまっている彼女の背が見えた。その背が小さく震えている。彼女は顔を手で覆ってすすり泣いていた。
とり返しのつかない回り道をしたことが、わかったのだろう。この家は自分の来る家ではなかったのだと、はっきりわかったのだろう。立ち上がった彼女の眼からほとばしるように涙があふれ落ちていた。
二度と来ることはないBの家をしばらく眺めた後、彼女はゆっくりと歩き出した。寂しげな微笑を浮かべ足音を立てずに離れて行った。
それまでじっと、うつむいていたF子さんの母親が、顔を上げてBを見た。そして立ち上がってキッとBを見た。ひと声も発しないが、その眼から抗議ともとれる涙を見せていた。F子さんの後を追う母親の姿が哀れに見えて胸がつまった。地上に影を曳いて母親はゆっくりと遠ざかって行った。
明るいうちに、そう思って帰ることにした。
私ら父子を見送るB一家に、私は振り返らずに小石を蹴って歩いた。
途中、道わきの大きな樫の木のそばに、数人の女性が集まって立ち話をしていた。
「戦争に負けた兵隊さんが、毛布や衣類などお土産に持って帰るなんておかしかあ。その上女の人まで連れて復員する人もおらすとばい。ほんなこてあきれてものも言えん。日本のオトコはどうかしとる。全くアテにならん。これから先の日本は女がしっかりせんと、どうにもならんとじゃなかろうか。
わが家の門をくぐる前に、近くの先祖の墓に復員の報告をするごたる気持のなかけん、間違いを起こすと

たい」
わたしら父子はこの人たちの前を頭を下げて通り過ぎた。
復員して間もなかった私はいろいろと考えさせられた。それから五カ月後、父は六十七歳であの世へ旅立った。一緒に船で出かけたのはこの時が最後だったから、忘れることはない。
それから私ら父子は、夜はホタルの舞う川沿いの道を波止場へとゆっくり歩いた。黙り込んだままとぼとぼと歩いた。日はすでに西に傾いて力を失っていた。
波止場にはF子さん母娘が立って海をじっと見ていた。話しかける母親に
「お母さん、お願いだから過ぎたことはいろいろとあんまり言わないでよ。辛くなるばっかしだからさ、哀しくなるばかりだから」
いくらか咎めるような口調で言った。その眼からは新たな涙が落ちていた。うつむいて唇を噛んでいた。
「F子さん。生きていれば、生きてさえいれば、必ずいいこともありますよ。辛いでしょうがどうか元気を出して下さい」
父は平凡なことを言った。彼女は素直にうなずいてこう言った。
「いまはそっと母と二人で静かに過ごすのが、私にとって心の傷手の癒し方ではないか、そう思います」
その痛々しいもの言いに私は胸をつかれた。
時がたてば人の気持というものは、変わるということを思い知らされた母娘である。
小さな波止場に潮は満ちていた。もう二度と会うことはないであろうこの母娘の、これからの生き方を

思うと胸がつまった。
世の中には家族に恵まれず、ひとり侘びしく暮れ正月を迎える人も少なくない、こんな話をしたかったが、声にならなかった。
太陽の傾きをしらせるかのように、ヒグラシが鳴いた。
途中、エンジンの故障で遅くなり、島に着いたのは夜だった。母が海辺で待っていた。
星が一つ流れた。星空をあまり眺めることなどなかった私だったが、この夜はじっと空を仰いだ。星がおどろくほどはっきりと、空の隅々まできらめいていた。